

聖書：第二サムエル記2章8～17節

説教：剣が人を滅ぼしてよいものか

1 登場人物

1) 全イスラエル（イシュ・ボシェテ王、將軍アブネル）

イスラエルの最初の王であったサウルが戦いの最前線で倒れました。その知らせを聞いたダビデは、祖国イスラエルを救うために亡命先から帰国します。しかし、ダビデを王として迎えたのはユダ部族だけで、ほかの部族は彼を拒みます。ダビデが戻ってきたことにより、イスラエルに混乱をもたらす結果となってしまいます。

今日の箇所に入る前に、ここに何人かの人物の名前が挙がっていますので、少し整理しておきます。

まず「サウルの子イシュ・ボシェテ」から。サウルには四人の息子がいて、そのうち上の三人は戦いで父サウルとともに倒れてしまいます。王位継承権があるのは、生き残った末の息子イシュ・ボシェテです。とは言え、彼ひとりでイスラエル軍をコントロールする力はありません。後ろ盾が必要です。それがサウルの將軍であったアブネルという人でした。アブネルは、サウル家を立て直すためにイシュ・ボシェテをマハナインという町に連れて行き、そこで全イスラエルの王とします。

イスラエルは、ヨシュアの時代から十二の部族ごとに、あるいは大きな町であれば町ごとに独立して治めていく、そのような政治体制を取ってきました。サウル亡き後、ユダ部族を除いた他のすべての部族や町はこのイ

シュ・ボシェテを支持し、イスラエルの王と認めます。

2) ユダ部族（ダビデ王、將軍ヨアブ）

一方、ダビデの側についたのはユダ部族だけです。ダビデは片田舎の小さな政治家に過ぎません。そんなダビデを後ろから支え続けたのが將軍ヨアブでした。彼がどんな人物であったのか、彼の生涯をたどっていくとかなり複雑なところがあるようです。彼はダビデの有力な側近でしたが、いっぼうでヨアブの起こした大きな事件でダビデは生涯苦々しめられることにもなります。そんな面はありますが、今日の箇所を見てもわかるように、彼はサウル軍を相手に優勢な戦いをしていますから、軍人として有能な人物であったようです。

2 イスラエルの現実

1) ヤベシュ・ギルアデの人々の態度

ダビデは、サウルの家と衝突することを避けるために、あらゆる手立てを尽くします。その一環として、ヤベシュ・ギルアデにメッセージを送りました。前回は触れましたが、サウルが戦場で倒れたとき、そのなきがらを危険を顧みずに敵の手から取り戻し、丁寧に葬ったのがヤベシュ・ギルアデの人たちです。そのような人たちにダビデは、「あたがたに主の祝福があるように」と語ります。つまり、「自分はあなたがたの敵ではない。仲間であるから安心してください」という政治的な

メッセージです。

ヤベシュ・ギルアデの人々がこのメッセージにどのように応じたかは、直接にはなにも記されていません。けれども間接的なヒントは記されています。8、9節です。「一方、サウルの將軍であつたネルの子アブネルは、サウルの子イシュ・ボシェテをマナハイムに連れて行き、彼をギルアデ、アシュル人、イズレエル人、エフライム、ベニヤミン、全イスラエルの王とした。」ここにギルアデという地名があります。ヤベシュ・ギルアデの人々は、そのままサウル派に留まったことがこれでわかります。ダビデのメッセージを拒否したということです。理由は推測するしかありませんが、ひとつには地理的な事情もあつたようです。ダビデがいるヘブロンと自分たちが住んでいるギルアデは遠く離れています。一方、イシュ・ボシェテがいるマナハイムは目と先にあります。わざわざ遠くにいるダビデを王様とすることはむずかしかつたのかもしれない。

ダビデが争いを避けようとした努力は無駄に終わりました。サウルの家との衝突は決定的になります。

2) 争いが激しくなる

今日開いている箇所が、その最初の衝突の場面です。將軍アブネルが率いるサウルの軍と將軍ヨアブが率いるダビデの軍はギブオン池に集結し、向かい合いました。「池」と聞くと、ちょっとした広さの水たまりを想像するでしょう。ところが実際に写真で見るとそのようなものとはだいぶ違います。水をくみ出すために人が掘った、直径11メートル、深さ二十メートルの穴です。穴の周囲には螺旋状の階段もあります。この巨大な穴を

挟んで二つの軍隊が対峙しました。互いに十二人の兵士を出して、一対一で戦わせました。両者一つに組み合せて倒れました。勝敗が決まりません。結局、全軍が真正面からぶつかり合う激しい戦いにエスカレートしてしまいます。

3 御心が天で行われるように地でも行われますように

1) 神の国の実現のために多少の犠牲はやむを得ない？

ダビデが最もおそれていた最悪の事態が起きてしまいました。彼がこのことをどのように考えていたのかについては、聖書になにも記されていません。ダビデは、若いときに主に油注がれ、将来イスラエルの王となることが約束されていた人でした。信仰の友であつた親友ヨナタンも、ダビデがサウルの次の王となることを確信し、ダビデが弱気になるようなときにいつも励ましてくれていました。なので、ダビデはこう思っていたのでしょうか。「自分がイスラエルの次の王となることは、神の計画としてすでに定められている。神の御旨がなされるためには、多少の犠牲者が出てはやむを得ない。」

確かにこのあとダビデはイスラエルの王となり、神の御旨は実現します。その裏で多くの兵士が死に、残された家族は悲しみにくられたはずですが、人が死ぬことよりも、イスラエルという神の国が一つの国となってまともになっていくことがそれほど大切なのでしょう。でも、神の国は私たちが救うためにあるのではなかったのではないか。これではまるで話が逆さまです。

イエスは、地上に神の国をもたらすために来られました。その神の国はどのようにして

来たのでしょうか。強い軍隊によってですか。反対です。天の軍勢を呼ぶことさえできる方が、すべての力を捨てて、弱い者となられました。神の国がこの地上に来たとき、誰が倒れましたか。人が死にましたか。人が犠牲になりましたか。人ではありません。神が死なれました。神のひとり子が犠牲となられました。

こうしてみると、神の国が実現されるために、多生の犠牲者が出ておかまわぬ。そのような考えは聖書の世界とまったく相容れないとわかります。では、今日の箇所のことはいったいどのように考えたらよいのでしょうか。

2)いつまでも剣が人を滅ぼしてよいのものか

旧約聖書を読んでいて、皆さんはすでに気がついておられると思うのですが、聖書には実にたくさんの生々しい事件が記されています。殺人はもちろん、近親相姦もあれば、人が人の肉を食べることも書かれています。どうしてこのようなことまで赤裸々に書くのか、とまどう方も多いはず。今日の所も同じです。これが信仰とどんな関係があるのか。とまどいます。

ダビデをとおして見えてくる主イエスの姿に目を留めたいと思います。旧約であろうが新約であろうが神の御心が変わることはありません。人のいのちが失われてはならないのです。人の血が流されてはならないのです。それが変わることはない神の御心です。ではどうして神は、この世界から戦争をなくそうとされないのか。どうして神は、悲惨な事故や災害を留めようとはなさらないのか。昔から人々は問いかけてきました。神はなに

も働かれない。神はいないのだと言う方さえいます。

聖書は、私たちが置かれている現実からかけ離れた理想の世界を描いているのではありません。私たちが置かれている現実から目をそらさずにそのまま描いている。それが聖書です。

ですから私はこのように言いたい。神がいけないのではない。神は、私たちの置かれているこの現実を目を留めていておられる。人が死んでいくことが神にとって本当につらいのです。だから聖書は、人が争い死んでいくこと、殺されていくことをそのまま書くのです。

ダビデは争いを止めようと祈り、自分にできる事を精一杯の努力をしました。けれども戦争は起きてしまいます。ダビデは、このようにして人が殺し合うという現実に向け込まれ、苦しんでいきます。主も神でありながら罪の世に来てくださり、そこで苦しみました。

私たちも同じです。信仰をもって祈り、願っても、望まないことが起きてしまいます。あるときは災害に巻き込まれます。突然の病に倒れます。自分の口から出たことばが人を傷つけることがあります。罪だと知りながら、同じ過ちをことを繰り返しています。どんなにすばらしい信仰があろうとも、罪によるわざわいから逃れることはできません。パウロが苦しんだのと同じように、聖書が教える救いの約束と、罪の狭間で苦しんでいます。これが私たちの現実です。

神はこの現実をどうされるのでしょうか。神は、アブネルの口を通してこう言わせました。26節。「いつまでも剣が人を滅ぼしてよいものか。その果ては、ひどいことになるのを

知らないのか。」同じことを、主も言われます。「剣をもとに納めなさい。剣を取る者はみな剣で滅びます。」(マタイ 26 章 52 節)

私たちは、口で「この地に御心がなされますように」と祈ります。でも心のなかに何かあるでしょう。自分を憎む者を憎み、人を赦さず、呪いのことばを投げつけていく。拳げ句の果てには、「あんな者は死んだほうがよいのだ」と叫んでいるのではないか。心の中で、剣を振りかざし、人を滅ぼしているのではないですか。

戦争がなくならないのは神のせいだ言う前に、まず自分の心を見つめてみたらどうでしょう。人を赦さないままにいるのは誰ですか。赦さなければいつまでも争いは続いていく。それは結局、誰の責任なのでしょうか。

「いつまでも剣が人を滅ぼしてよいものか。」これが神の御心です。けれども私たちは人を赦すことができず、争いを繰り返しています。赦さなければならぬことは頭で分かります。でも、むずかしい。そこで苦しんでいます。そのことを思えば思うほど、主が与えてくださった赦しがどれほどに深いものであったのかが迫ってきます。十字架の赦しの恵みに感謝します。